

[B年] 聖霊降臨節第12主日(2022年8月21日)

【旧約聖書日課】 イザヤ書54章1～8節

1 喜び歌え、不妊の女、子を産まなかった女よ。

歓声をあげ、喜び歌え
産みの苦しみをしたことのない女よ。
夫に捨てられた女の子供らは
夫ある女の子供らよりも数多くなると
主は言われる。

2 あなたの天幕に場所を広く取り

あなたの住まいの幕を広げ
惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て。

3 あなたは右に左に増え広がり

あなたの子孫は諸国の民の土地を継ぎ
荒れ果てた町々には再び人が住む。

4 恐れるな、もはや恥を受けることはないから。

うるたえるな、もはや辱められることはないから。
若いときの恥を忘れよ。
やもめのときの屈辱を再び思い出すな。

5 あなたの造り主があなたの夫となられる。

その御名は万軍の主。
あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神
全地の神と呼ばれる方。

6 捨てられて、苦悩する妻を呼ぶように

主はあなたを呼ばれる。
若いときの妻を見放せようかと
あなたの神は言われる。

7 わずかの間、わたしはあなたを捨てたが

深い憐れみをもってわたしはあなたを引き寄せた。

8 ひととき、激しく怒って顔をあなたから隠したが

とこしえの慈しみをもってあなたを憐れむと
あなたを贖う主は言われる。

【使徒書日課】

エフェソの信徒への手紙5章21節～6章4節

5 ²¹キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。

²²妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。²³キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。

²⁴また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。

²⁵夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。²⁶キリストがそうなされたのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、²⁷しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。²⁸そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。²⁹わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になされたように、わが身を養い、いたわるものです。³⁰わたしたちは、キリストの体の一部なのです。³¹「それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」³²この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。³³いづれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。

6 ¹子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。²「父と母を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。³「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」という約束です。

⁴父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。

【福音書日課】

マルコによる福音書10章13～16節

¹³イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。¹⁴しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。¹⁵はつきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」¹⁶そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書54章1～8節

1 喜び歌え、子を産まなかった不妊の女よ。

歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。
夫に捨てられた女の子どもは
夫のある女の子どもより多いからだ
——主の仰せ。

2 あなたの天幕の場所を広くし

住まいの幕を惜しまず広げ
綱を長くし、杭を揺るぎないものとせよ。

3 あなたは右に左に増え広がり

子孫は国々を所有し
荒れ果てた町を人の住む所とする。

4 恐れるな、あなたが恥入ることはない。

恥じるな、あなたが辱められることはない。
あなたは若い時の恥を忘れ
やもめであったときの屈辱を
二度と思い出すことはない。

5 あなたの夫はあなたを造られた方。

その名は万軍の主。
あなたの贖い主はイスラエルの聖なる方で
全地の神と呼ばれている。

6 捨てられて、心を痛めた妻を呼ぶように

主はあなたを呼ばれる。
若い時の妻を見捨てることなどできようか
——あなたの神は言われる。

7 ほんの僅かな間、私はあなたを捨てたが

深い憐れみをもって、あなたを連れ戻す。

8 怒りが溢れ

僅かな間、私顔をあなたから隠したが
とこしえの慈しみをもってあなたを憐れむ
——あなたの贖い主、主は言われる。

エフェソの信徒への手紙5章21節～6章4節

5 ²¹キリストに対する畏れをもって、互いに従いなさい。²²妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい。²³キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。²⁴教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。²⁵夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自分をお与えになっ

たように、妻を愛しなさい。²⁶キリストがそうなさったのは、言葉と共に水で洗うことによって、教会を清めて聖なるものとし、²⁷染みやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、傷のない、栄光に輝く教会を、ご自分の前に立たせるためでした。²⁸そのように夫も、自分の体のように、妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。²⁹これまで、誰もわが身を憎んだ者はいません。かえって、キリストが教会になさったように、わが身を養い、いたわるのです。³⁰私たちはキリストの体の一部なのです。³¹「こういうわけで、人は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。」³²この秘義(→神秘)は偉大です。私は、キリストと教会とを指して言っているのです。³³いづれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。

6 1子どもたち、主にあって両親に従いなさい。それは正しいことだからです。²「父と母を敬いなさい。」これは第一の戒めで、次の約束を伴います。³「そうすれば、あなたは幸せになり、地上で長く生きることが出来る。」⁴父親たち、子どもを怒らせず、主の諭しによって育てなさい。

マルコによる福音書10章13～16節

¹³イエスに触れていただくために、人々が子どもたちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。¹⁴イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子どもたちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。¹⁵よく言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」¹⁶そして、子どもたちを抱き寄せて、手を置いて祝福された。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・8月21日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は「家族」。『聖書』の背景に見られる家族主義・血族主義的傾向は、他文化・他民族と比較して特異なものがあるわけではない。しかし、「新約」全般には、明らかに血族的家族主義を越えた新しい家族的共同体を志向する実践が見られ、主イエスの率いられた弟子集団から初代教会へと引き継がれ、拡大、制度化されるのに伴って神学思想的基盤を形成していったものと考えられる。その背景には、紀元1世紀以降のユダヤ人社会およびローマ帝国下の社会全般で進行していた既存の社会・共同体の解体・再構築の問題があったと考えられる。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、「主の(苦難の)僕」を媒介してもたらされる救済を確信し祝福を告げる箇所から。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、教会共同体に属する信仰者各々の家族間の関係性のあり方を教える箇所から。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、弟子たちが排除しようとした子どもたちを主イエスが受け入れ祝福されたことを伝える逸話箇所。

旧約日課(イザヤ 54 章より)

・「イザヤ書」は、三大預言書の一つで、ユダヤ正典では「後の預言者」の第一に置かれている預言書。「前の預言者」の最後に置かれている「列王記」と密接な関係があり(ほぼ同じ記述が4章にわたって重複してみられる)、正典「預言者」全体の編纂において紐帯の役割を与えられていると考えられる。「イザヤ書」は、背景となる時代の違いから、39章までを「第一イザヤ」、40章以下を「第二イザヤ」と区分して扱うのが一般的。歴史的人物としての預言者イザヤ(紀元前700年前後)と直接結びつくのは「第一イザヤ」で、「第二イザヤ」は、バビロン捕囚から解放されていくペルシア支配時代(前538年以降)に歴史的預言者イザヤを祖師と仰ぐ預言者集団によって付加された預言集と考えられている。

・日課箇所は、「第二イザヤ」に含まれ、「主の苦難の僕」を媒介として民に救いがもたらされることを確信し祝福を告げる預言となっている。背景にあるのは、数十年におよんだ「バビロン捕囚」の経験である。南王国ユダは、前7世紀、衰退するアッシリアの支配を脱し新興バビロニア・メディア連合に同調したヨシヤ王(在位=前640~609年頃)の戦死後、親エジプト派を主体とした宮廷のもとでバビロニアの支配下に置かれていくようになり、最終的にエルサレム陥落(前587年頃)により滅亡させられるが、親バビロニア派のダビデ王家は捕囚名目ながら「バビロン」で存続した。この王家の存続があったからこそ、ペルシア支配の時代を迎えて捕囚が解かれたとき、ユダヤ帰還とエルサレム神殿再建および共同体再建を成し得たのである。

使徒書日課(エフェソ 5~6 章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡」の一つで、パウロが2~3年滞在中に活動拠点としていたとされるアジア州エフェソの「キリスト・イエスを信ずる人たち」に宛てて記されている。「使徒言行録」によればパウロとエフェソの教会共同体との関係は深く(使徒20章など参照)、個別具体的な事情を知っていたと推察されるが、本書簡にはそのような事情をうかがわせる記述がほとんど見られず、全般的に教えはキリスト信者としての基本的な対人・生活態度などに終始しているため、近代の聖書学者の中には、パウロの真筆性を疑う者も少なくない。とは言え、「使徒言行録」によれば、パウロは、おそらくエフェソ滞在中にユダヤ人(キリスト教徒も含む)の一部と対立し、政敵から逃れるようにしてエフェソを離れたと考えられるので、彼がそのエフェソ(をはじめとするアジア州)の教会共同体に宛てて対立するグループの和解を願って書き送ったのだとすれば、一方に肩入れをする形式にならないように(親パウロ派を具体的に類推させないように)配慮した内容に収めたとも考えられる。また、エフェソは、当時の地中海世界では、アテネ、アレキサンドリアと並ぶ古典ギリシア文化の伝統継承地として名高く、文化的にも、より概念化、一般化した教えが好まれたということも、叙述形式に影響を与えたかもしれない。

・日課箇所は、冒頭「…互いに仕え合いなさい」を一般原則として、妻と夫、親と子、奴隷と主人という一般的な家庭内の人間関係を教える箇所。妻と夫に関する教え部分は、伝統的に結婚式文にも用いられてきたことで知られる。

・5:21「仕える」(ヒュポタツソー)は、「下に置く」が原義で「支配される/服する」の意味で用いられる。パウロはこの語を、キリストの下に服することを示すために用いるが(1:22、5:24を参照)、同時にキリストとは異なるもの下に服した状態にあることを指しても用いており、客観的な状況というよりも人が自分の意志で何者に服するのかという文脈で用いている。

・6:1「従う」(ヒュパクーオー)は、「下で聞く」が原義で、「聞き従う」の意で用いられる。「ヒュポタツソー」がもつばら従う者の側の態度を表しているのに対して、「ヒュパクーオー」は、命じたり教えたりする者に対する従う者の姿勢を表している。

・5:33「敬いなさい」(フォベオマイ)は、「恐れる」が原義で、「恐れ畏む」の意で用いられている。一方、6:2「敬いなさい」(ティマオー)は、「見積もる/評価する」が原義で、「価値を認める」の意で用いられている。ここでも、「フォベオマイ」が相手に対して一方的自発的に決めた態度を表しているのに対して、「ティマオー」は、相手と自分との相互関係を踏まえた姿勢を表すものという違いが見られる。夫婦間の関係がおのおのの自発的決断に重きを置かれているのに対して、親子間の関係は、その関係性のゆえに当然生じてくる立場を重んじることに焦点が置かれていると言える。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスが親に連れて来られた子どもたちを祝福された逸話を伝えており、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。共観福音書が伝える逸話の構成は共通しており、主イエスに会わせる(触れていただく、手を置いていただく)ために子ども(乳飲み子)を連れて来た者たちが、はじめは弟子たちによって拒まれるが、その弟子たちの対応を主イエスが批判され、連れて来られた子どもたちを呼び寄せ(抱き上げ)られた、と描かれる。ただし、細部の描写は福音書間で異同がある。

・13 節「叱った」(エピティマオー)は、「低く見積もる」が原義で、「悪い評価をする／非難する」の意で用いられている。マルコ福音書中では、もっぱら、主イエスが「汚れた霊」や「弟子」に対してなされたことを表すために用いられており、主イエス以外を主語とする例はこの箇所のほかは一箇所(8:32)のみ。弟子たちは、主イエスを真似て「汚れた霊」か「劣った弟子」に対するようなつもりで、子どもたちを連れて来た人々を「叱った」ということなのだろう。この弟子たちの態度に対する主イエスの反応を「憤る」(アガナクテオー)という(例外的に)強い表現で物語るのは、共観福音書中マルコのみである。この主イエスの過剰とも思える反応の描写から、主イエスがどのような者に「価値」を見いだそうとされていたのかということに対する弟子たちの理解が推認される。同様のことは、8:32での用例についても推認される。

来週の誕生日 (8月21日～27日)**主日礼拝の讚美歌から**

・21-202 番「よろこびとさかえに満つ」(= I 53 番「さかえあるいこいの日よ」)は、11-12 世紀フランスの神学者ペトルス・アベラルドゥス(ピエール・アベラル)の作詞。彼は、若いころに恋仲であったエロイズが院長を務める修道院の晩課 *Vespers* のために書き、自身の讚美歌集に収めた。原曲は 17 世紀フランスの歌集に収められた教会旋法の曲で、19 世紀に英国教会の音楽家ヘルマーによって現行の旋律に改められ、広く歌われるように。

・21-105 番「ガリラヤの村を」(= □61、□5)は、19 世紀英国の国教会司祭からユニテリアンに転じた神学者ストップフォード・ブルックが福音書の「子どもを祝福するキリスト」に即して作詞。曲は、20 世紀前半英国教会の教会音楽家としてエルガーの後任の王室音楽家も務めたヘンリー・デーヴィスが自らの指導する学生グループに作曲させたもの。

・21-543 番「キリストの前に」(歌詞 = I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讚美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讚美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、

『讚美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

21-202「よろこびとさかえに満つ」**O quanta qualia**

1. O quanta, qualia sunt illa sabbata / quae semper celebrat superna curia. / quae fessis requies, quae merces fortibus, / cum erit omnia Deus in omnibus.
2. vere Ierusalem est illa civitas, / cuius pax iugis est, summa iucunditas, / ubi non praevenerit rem desiderium, / nec desiderio minus est praemium.
3. quis rex, quae curia, quale palatium, / quae pax, quae requies, quod illud gaudium, / huius participes exponant gloriam, / si quantum sentiunt, possint exprimere.
4. nostrum est interim mentem erigere / et totis patriam votis appetere, / et ad Ierusalem a Babylonia / post longa regredi tandem exilia.
5. illic molestiis finitis omnibus / securi cantica Sion cantabimus, / et iuges gratias de donis gratiae / beata referet plebs tibi, Domine.
6. illic ex sabbato succedet sabbatum, / perpes laetitia sabbatizantium, / nec ineffabiles cessabunt iubili, / quos decantabimus et nos et angeli.
7. perenni Domino perpes sit gloria, / ex quo sunt, per quem sunt, in quo sunt omnia; / ex quo sunt, Pater est; per quem sunt, Filius; / in quo sunt, Patris et Filii Spiritus.

English translation

1. Blessing and honor and glory and power, / wisdom and riches and strength evermore, / be to the Lamb who our battle has won, / whose are the kingdom, the crown, and the throne.
2. Let all the heavens sound forth Jesus' name; / let all the earth sing his glory and fame. / Ocean and mountain, stream, forest, and flower / echo these praises and tell of God's power.
3. Ever ascending the song and the joy, / ever descending the love from on high; / blessing and honor and glory and praise: / this is the theme of the hymns that we raise.
4. Give we the glory and praise to the Lamb; / take we the robe and the harp and the palm; / sing we the song of the Lamb that was slain, / dying in weakness but rising to reign.

21-105「ガリラヤの村を」**It fell upon a summer day**

1. It fell upon a summer day, / when Jesus walked in Galilee, / the mothers from a village brought / their children to his knee.
2. He took them in his arms, and laid / his hands on each remembered head; / "Allow these little ones to come / to me," he gently said.
3. 'Forbid them not; unless ye bear / the childlike heart your hearts within, / unto my kingdom ye may come, / but may not enter in.'
4. My Lord, I fain would enter there; / O let me follow thee, and share / thy meek and lowly heart, and be / freed from all worldly care.
5. O happy thus to live and move, / and sweet this world, where I shall find / God's beauty everywhere, his love, / his good in humankind.
6. Then, Father, grant this childlike heart, / that I may come to Christ, and feel / his hands on me in blessing laid, / love-giving, strong to heal.